[COMMUNION]
WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html
E-mail:comm.tko@nskk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office

コミュニオン

東京教区時報［秋号］

第５４号
（通巻１２８９号）
2019年10月27日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園3-6-18

司祭 テモテ 小笠原 忍師を偲んで

司祭 笹森 田鶴

テモテ小笠原忍司祭は、司祭としてのディシプリン、つまり規律、そして優先順位の明確なお方でした。ご自身のするべき事柄や選ぶべき事柄は、すべて神によって示されているという確信をお持ちだったからです。ご自分がどうしたいかではなく、主がご自身を通して何をされようとしているのか、ということについて、日々み言葉と祈りによって求め、その役割を全うすることを第一に念頭におかれて日々を過ごしておいでした。そのディシプリンに従い、キリスト者として、司祭として、するべきことがあればそれは当然することである、ということに何のてらいも、気負いもないお方でした。その役割を負っている以上、自分の好き嫌いの判断ではなく、また人が嫌がるような役割であっても、ただ実施するのです。

以前、小笠原先生がおっしゃってくださったことがありました。「常置委員会が何かを判断する場合、少し厳しいと思われるぐらいで良いよ。そうすると、主教がまあまあと割って入ってきて、主教が聖職を指導したり、纏めたりすることが容易になる。そうやって教区が纏まって教区全体の益となっていけば良いのだから。」

まさにご自分がどう思われるかよりも、どうしたら教区全体が主の僕の共同体として仕えていくことができるかということだけに思いを向けられていた小笠原先生らしいご発言だと思ったものです。そして、わたしたち後輩聖職は、そのような小笠原先生にきちんと叱ってもらえたという非常に有難い経験をそれぞれ持っています。

２０１３年３月、多発性骨髄腫の診断を小笠原先生は受けます。あと２年という宣告後、非常に厳しい病状に何度もなられました。しかしその度に病気にも苦しみの中でもその状況をすべて受け入れておられました。病状が和らいでも、やはり体力を落とされます。そして少しずつご自分のできることが減っていった時においても、ますます精錬された司祭としてのディシプリンを全うされ、この聖アンデレ教会において、わたしたちと主日の礼拝をご一緒してくださいました。たとえ入堂がご無理であっても、司祭として登壇され、礼拝が進むにつれて力を回復されて、退堂はご一緒ということがしばしばありました。聖堂の段を一歩降りることに丁寧に集中しながら退堂されるお姿に、わたしたちは小笠原先生の神への信頼の深さを目の当たりにさせていただきました。決してご無理はされず、しかし神から託された司祭職への忠実なご奉仕は可能な限りきっちりとされる。ただそのことにだけに喜びをもって全存在を向けられるそのお姿に、わたしたちはどれほど励まされたことでしょうか。

そして、とうとう２０１７年２月12日の主日、小笠原先生の思いとは裏腹に体のご不調のために主日礼拝に参加できないという状況になられます。そしてご自分の痛みや辛さよりも、主日礼拝に司祭職として参列できないそのことをベッドで嘆かれ、悲しまれ、同年３月末に聖アンデレ教会嘱託を終えられることとなります。

その後、自宅に伺わせていただく折も、ベッドで横になられた方がお楽にもかかわらず、後輩聖職にサクラメントへの向き合い方を教えてくださるかのように、その時にはしっかりとご自分で座られ、祈りを唱えられ、陪餐する姿を見せてくださり、また教区を案じ、祈ってくださいました。

最後まで司祭としてご奉職くださり、今、この棺の中においても、いつもの礼拝でのお姿のままで横になられています。

わたしには感謝の言葉しかありません。それゆえに、誰よりも小笠原先生が信頼しておられる神を賛美することだけです。おそらく、この場においてわたしたち一同が主に栄光を帰し、神を賛美していることをこそ、小笠原先生が一番喜んでくださり、ご一緒してくださることだと確信いたします。

（通夜の祈り教話より抜粋）

2019新しい聖地旅行　その2

新しい聖地旅行（サラーム・パレスチナ主催）も回を重ねると、伝えたい内容も変化します。

キリスト教の2000年とパレスチナ問題の今

この旅行のハイライトである十字架の道行は、当時の面影を留めない現在の生活者の場となっているが、そのエピソードに因む箇所での聖書の反芻と、この地域の人々が抱える問題解決に向けての祈りで、キリストの受難も現在パレスチナ人の受難も通底する物は変わらない事に思い至る。その到達点に建つ聖墳墓教会には、有史以来相克を繰り返してきた、その教義も異なる5つの教会が、今はイエスの大きな懐に抱かれるように一つ屋根に共存している様は、感動的である。パレスチナ祖国回復運動の担い手、サビール（注）との交流は本旅行の目的の一つで、彼らから聞く現実に、我々が見聞きしている知識は当局のプロパガンダであった事を知らされ、己が無知を恥じると共に、この遣り切れない気持ちの正体は、この現実はパレスチナ人がこの地から消滅するまで続くのではないかと言う恐怖から来るのだと悟る。長い西洋史で常に被害者であったユダヤ人が、この地では何故斯くも傲慢、無慈悲になれるのか、悩みは深い。旅程の最終盤、清涼且つ安寧な環境下、ガリラヤ湖畔の修道院で与った聖餐式と黙想会に深く感謝すると共に、この両者が一日も早く和解し、この様な平穏と落ち着きを取り戻す事が出来る事を願わずにはいられなかった。

（M・U）

十字架の道行きの　第13留　イエスが十字架から降ろされたとされる石にひれ伏して祈る巡礼者たち（聖墳墓教会内）

私たちの友人オマール・ハラミ

私たちの希望に沿い企画からプログラム遂行まであらゆる手配をし、かつ案内ガイドを務めてくれたサビールの職員です。律儀できめ細かくすべての参加者に最大の満足を提供することに心砕く一方で、パレスチナ人の置かれた状況を熱くユーモアを交えて語ります。

祖先はペンテコステ以来のエルサレムのクリスチャンの旧家の一つだそうで東方教会に属します。

第1次インティファーダ（一斉蜂起）時期に青春期を過ごし、自分たちは何を為すべきか悩んでいたところ教会の司祭はクリスチャンが政治活動などすべきでないと聖書の言葉を用いていさめたため司祭に対抗する手段として初めて福音書を通読。イエスの恵みに満ちたメッセージに感動、喜びにあふれたそうです。キリストの福音は固定された理解ではなく虐げられている人々が束縛から解放される正義と平和のメッセージであると説くサビールのアティーク司祭に出会い、活動に参加するようになります。

（A・I）

オマール・ハラミさん

アンドラーボス

サビールの活動に共感し2018年に国連職員からサビール職員として新たに加わった。彼もオマールさんと同じ1980年に、パレスチナに生を受けた。ルーツはヨルダン地方のベドウィン族に遡るが、既に遊牧生活から定住生活に移って久しく、彼の祖父母もパレスチナの祖国を追われた身だ。サビール職員になる前の6年間はヨルダン川西岸地区の村々をめぐり、人権侵害や不正に関する記録を、村人たちの証言を基に収集し纏める仕事に邁進していた。結婚を機に、日々厳しい現実と向き合うこれまでの働き方に折り合いをつけて、別の形で「公正」を実現すべく、オマールと共にサビールを支える事にした。今の仕事に遣り甲斐は感じながらも、結婚を機に心境の変化が表れたという。妻との間に子供を授かった時、果たしてこの土地は家族3人安心して暮らせる場所なのだろうか、と。大義を捨てるわけでは無い。でも、この出口に見えない戦いに彼は内心うんざりし、疲れ果てていた。暴力も差別もない場所に移住することは逃げなのか？揺れ続ける苦しい思いを抱えながら、彼は少しずつ且つ着実に、パレスチナの地を離れる決断を固め始めている。

（Y・M）

荒涼とした砂漠以外にこんな場所もマウント・プレシピス（イエスがつき落されかけた高い崖）からは肥沃なイェズレル平原が眺められる

世界で最も眺めの悪いホテルとよばれる、高さ８ｍの分離壁の目の前に2017年に建設されたベツレヘムのホテル

聖地旅行で思ったこと

聖地旅行のお誘いを受けた時、一度は行ってみたいと思っていました。受胎告知教会、パンと魚の奇跡の教会、鶏鳴教会と聖書の中にある事に感激でした。

ガリラヤ湖で2千年前と同じに穏やかな湖、イエスが福音を述べ始めた場所での黙想会、聖歌363番ガリラヤの風薫る丘で～心にしみいる。ヨルダン川で洗礼者ヨハネの宣教の川、イエスもヨハネから洗礼を受け神の霊が鳩のように下ったと聖書にあるが、素晴らしい川。

一方、元々パレスチナの土地であったイスラエルは1948年からユダヤ人が侵入、年々パレスチナ領、侵入によって削られ、高い分離壁で囲まれ、パレスチナ人は税金を負わせられ、ゴミを捨てられ迫害の生活を強いられている。イスラエルにはまだまだ平和がない、どうか主の平和がありますようにと祈る。

（K・T）

注：サビールとはアラビア語で「道」あるいは「泉」の意味。エキュメニカルかつ非暴力でパレスチナ解放の神学に基づいて平和活動をしている団体。

アブラハムの墓のあるヘブロンのかつての繁華街。ゴーストタウンとなった街をパトロールする兵士

留学を終えて

司祭　成　成鍾

まず皆様に3年間の学びの機会が与えられたことを感謝致します。神様の導きと教区の寛大な配慮で言葉では言い表せないほど恵みに溢れた時を過ごさせていただきました。

・経　緯

小職は20数年前、神学校に在学時から霊性神学に関心を持っていました。その後も学びと実践を積みつつ、霊性修練の実践について雑誌に連載したり、共同体の霊性修練に関する単行本を出版したり、宣教師として沖縄教区に派遣されてからは、毎年聖職と信徒を10日間の大沈黙リトリートに案内したりしました。また聖公会神学院でチャプレンとスピリチュアル・ディレクターとして勤めたときは、毎週の黙想会と霊的指導（個人・グループ）を行い、霊性神学の授業を持ちました。教区の司牧現場に戻ってからも、個人霊的指導を行ったり、教会や諸団体の黙想会やリトリートを案内するなど、御用のために遣わされてきました。20年近く、霊性関連のみ働きのために遣わされていることを、私は司祭として頂いている自分の召命として受け止めています。

ところが、み働きに用いられる機会が増えるほど、誰かを霊的に案内することの難しさを段々と痛感するようになりました。自分の至らなさによって尊い魂を過ちへ導くことのないように、自分の信仰を深めることはもちろんのこと、自己研鑽を積む必要性を強く感じるようになったのです。また休まず走ってきた日本での15年間の働きを振り返り、時代の変動と共に求められる宣教と牧会を準備したいという気持ちもあって、主教に休職を申し出ましたが、主教の提案により留学の形になりました。それゆえ最終的には、理論的な研究のために韓国の聖公会大学博士課程に入り、その後、実践的な学びを深めるためアメリカの霊性センターで経験を積むという計画を立て、1年半ずつ過ごすことになりました。

・韓国での理論的な学び

聖公会大学の博士（Ph.D）課程に在学しながら過ごした1年半は、学ぶことの喜びと厳しさを同時に与えてくれました。コースワークのため、霊性神学を心理学・科学・性・消費社会などの現代の諸般現象との関連で研究する科目を主に受講しました。またコロキオムといって、学生と教授たちが一緒に論文概要を発表し論じ合うときが毎週ありましたが、それを通して多様な刺激を受けられました。今は博士課程コースワーク修了のために求められる項目は全部クリア、修了に必要な単位をとり、外国語試験・卒業総合試験・論文計画書（プロポーザル）審査に合格、また学術雑誌に論文を掲載、という5つの過程を無事に通りました。これから論文作成と提出だけが残っています。

博士論文のテーマは「霊的指導」（霊的同伴とも言う）に関するものですが、具体的なタイトルは『道場としての霊的指導』（仮）となっています。これは場所論を借りて、アイデンティティを失いつつある現代社会、またその中にある教会における霊的指導の意義を語る内容となります。具体的には、現代の危機の原因を市場と戦場の拡大によって起こってしまう場所喪失と読み、場所性回復のためのキリスト教的な働きとして霊的指導を提案します。霊的指導とは三位一体の神が働く場に、指導者と同伴者が共に参加し省察・識別・形成・統合されていく修行の過程であるため『道場』であるということになります。

・アメリカでの実践的な学び

アメリカでは、エキュメニカル精神に基づいて設立されたシャレーム霊性形成センターでの霊的指導者プログラムに参加。世界的にも認知度の高い霊性センターであるがゆえにプログラムの内容はかなり濃く、実践的な学びとして、定期的に2人以上に霊的指導を行うこと、霊的指導を受けること、霊的指導に携わる人々とのピアグループミーティングに参加すること、それ以外にもテーマ別に分かれた霊的指導に関する文献を読んで幾つかの小論文を書くこと、また自分の霊性生活についての省察報告書を定期的に出すことなどが求められています。そのうち最も学びになることは、プログラムに携わる人々との交わりです。彼らは、聖霊に寄りかかる信仰とは何か、霊的同伴とは何かを、言葉だけではなく存在全体を通して示してくれます。このプログラムは、12月にまとめの論文を提出することで終わります。

これをもって、まだ学びの過程が残っている状態ではありますが、3年間の留学についての報告とさせていただきます。改めて、御礼を申し上げます と同時に、これからいただいた恵みを教区と教会の皆様と分かち合うことに力を注ぎたく存じます。

聖金曜日（受苦日）説教（要旨）
「十字架上の七聖語」（三）

主教　髙橋　宏幸

✝第六の御言葉
「成し遂げられた」

『『成し遂げられた』と言い、頭を垂れて息を引き取られた。」ちなみに、この後には『『父よ、私の霊を御手に委ねます』と言って、息を引き取られた。」と続きますが、その意味では2つの言葉は重なっており、同じ心を語っているといえます。

まずは先にでてくる「成し遂げられた」ですが、「大きなノルマをこなした、大きな仕事を成し遂げた、これで肩の荷が降りた」とイエス様は言われたのでしょうか？　それは明らかに違います。

そもそも、イエス様の心中奥深くにある思い、確信、信念、信仰とは、「すべては神様のなさることである」「神様こそが、すべてであられる」というもののはずです。加えて、他者の重荷を我が物としようというのがイエス様の生き方の軸でありました。そのイエス様が「成し遂げられた」と言われるのです。

したがって、そこで言われている心とは、明らかに「神様の思いを、願いを、私の中で成し遂げることが出来た！」

「神様が望まれることを、今まさに行い、献げることが出来た！」

「神様の思いを、私の思いとすることが出来た！」であり、その意味で「成し遂げることが出来ました。感謝します。」ではないでしょうか。

まかり間違っても、大きな仕事を終えることが出来てやれやれホッとしたという意味ではないでしょう。

あくまでも、神様の御心をイエス様ご自身の内に置かれ、それに向かってご自身が如何に在り続けることが出来たのか、しかも、ご自身の評価や鍛錬のためではなく、ただただ神様と私たちのために。

✝第七の御言葉
「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」

今の社会は、他の人に自分自身を委ねることを拒否する傾向があります。すべては自分の手で、力で、才能でと。しかし、そこまでなら「努力」「孤軍奮闘」という範囲ですが、すべてを自分の思うままにしようと、気に入らないことは拒否、拒絶する傾向が強い社会に生きています。

私の好きな映画で「キリストの最後の誘惑」という、当時たいへん物議を醸した映画があります。

この映画では、イエス様が十字架に磔にされ、その痛み、苦しみの極みの中にある心模様が描かれます。「あぁ、あの時こうしていれば、こんな風にはならなかっただろう」という様々な思いや後悔が頭をよぎります。

「あの時、救い主などと言わなければよかった」

「物分かりの悪い12人を弟子にしなければよかった」

「お金もないのに、あちこち歩き回り、苦労して誤解を受け、罵られバカにされてきたが、そんなことをしなければよかった」

「大人しくナザレの町で暮らし、父親の家業を継いで、結婚して子どもを授かり、孫を抱き、のどかに暮らしていればよかった」と一瞬思う、それが「最後の誘惑」として描かれます。

しかし、「いや、そういう思いを乗り越え、今ここで十字架に置かれて本当によかった」というのが、「最後の誘惑」を乗り越えられたイエス様の姿です。

神様の御心を行っていく上で、妨げとなること、落とし穴となるものに身を寄せること、それが「誘惑」であり、それを振り捨て、乗り越え、神様の道を選び取れた時「最後の誘惑」がイエス様から離れていったというのが、この映画のテーマでした。

イエス様のご生涯の中で誘惑や迷いは嫌になるほどは沢山あったでしょう。

私たちは、ともすれば「今の世の中、そんな事をいっても…」とか「前例がないから」という言葉で物事を片付けてしまいます。しかし、そういう生き方を、ことごとく打ち負かしていく姿を福音書は描きます。このことを、今一度私たちは見直してもよいのではないでしょうか。

「聖書に書かれていても、イエス様が言われても、世の中の仕組みがこうなっているから無理だ」というのに対して、「いや、やってみようではないか」と言いつつ、生きられたのがイエス様です。その大事なこと、大事な方を選び取られた時、初めて「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と言い切れる状況が起こったのです。

第4回女性団体連絡協議会

女性の課題に関する担当者（女性デスク）

京都教区司祭　大岡　左代子

9月3日（火）～4日（水）、「第4回女性団体連絡協議会」を開催しました。（於：管区事務所／牛込聖公会聖バルナバ教会ホール）この協議会は「情報と課題の共有にむけてのネットワークづくり」のため、女性デスクが日本聖公会に連なる女性の諸団体・グループ、女性の支援やエンパワメントに関わっている団体・グループに呼びかけて行っているもので、11の団体・グループから15名の参加者がありました。今回は特に「性暴力防止」と国連「持続可能な開発目標（SDGs エス・ディー・ジーズ）」をテーマとし、1日目はフォトジャーナリスト大藪（おおやぶ）順子（のぶこ）さんの公開講演会と写真展示を実施、2日目はSDGs の取り組みを中心に共に考える時間を持ちました。

大藪さんは、米国滞在中にレイプ被害をうけた経験を中心にお話くださいました。特に、加害者に寛容な日本社会の状況を指摘され、ともすれば被害者が責められてしまう風潮を決して許してはいけないことを再認識させられました。また被害後、いくつか回った教会は自分の居場所ではなかった、という告白は決してよそ事ではないと思いました。講演会場で、「椅子」に一つひとつ立てかけられて展示された「性暴力サバイバーたち」の写真（大藪さん撮影）は、彼女ら／彼らが一緒に会場にいるような効果を生み出していました。これからも性暴力防止について考え、発信し続けます。

2日目は、第63回国連女性の地位委員会（CSW63）に聖公会代表団の一人として参加された金子登美江さん（管区事務所総務主事・北関東教区）の報告を聞き、国連「持続可能な開発目標（SDGs）」は、アングリカン・コミュニオン宣教の5指標と繋がっているという指摘に目からウロコ。その後、カラー付箋の作業を通じて各団体の活動とSDGs の17の目標との関連を確認し合い、今後の課題について意見交換をしました。国連で決議されたものと聞くと私たちには縁遠いものと思いがちですが、17の目標は、あらゆるいのち、社会正義、人権の問題としてまさに宣教課題と結びついており、「誰一人取り残さない」というフレーズは、イエスの福音と直結するものではないかと気づかされました。ぜひ活動の場に持ち帰り、SDGs についても広めていきたいと確認しました。

この他、礼拝で用いられる〈ことば〉について、女性の聖職の課題についてなど、さまざまに分かち合い、エンパワメントと連帯の機会となったことをとても嬉しく思います。

[司祭のこの一冊]

母 ―オモニ―

姜尚中著
集英社2010年刊

司祭　金 大原

多様性を認め尊重し共存することで一つの社会は成長していくものだろう。そういう面で、個人的に「いつもいろいろなことを考えさせられ、日本を良い国にしようとしている人」と思っていた政治学者「姜尚中」氏の自伝的小説「母―オモニ―」を紹介したい。

本作は、在日朝鮮人1世の人生と経緯についての記録であり、在日の目で読みだした戦後日本の社会史であり、また、在日2世が1世に捧げる献詞であり、アイデンティティを探る成長小説であり、在日として生きていくことについての自問であり、「忘れてはいけない大切さ」に関する私たちへの問いかけでもある。

母親のことを韓国語で「オモニ」と言う。タイトルから分かる通り、これは歴史的な記録ではなく、母親の人生を小説の形式を借りて復元したものだ。小さに体に、家族のすべてのことを背負って、時代を超えてきた姜氏の母が、世の中の「オモニ」が描かれている。姜氏は「オモニという存在は私にとって大きな慰めである」と言っている。かけがえのないオモニとの思い出こそが生きる原動力ということだろう。

圧倒されるほど強い母親だったが、家族のためずっと自分を犠牲にし、とてつもなく大きな愛で生き抜いたオモニから、十字架の上のイエス、限りない愛を示してくださる神の姿が伺えたと言ったら言いすぎだろうか。でも、遠藤周作の言った通り、母親の温かさの根源は神様の一部だったと告白せざるを得ない。

著者は、オモニはどぶ泥のような悲惨さの中で、悲しくて辛い時に祈りをささげていたと思い浮かぶ。その様子を、「陰鬱で荒い息を吐きながら包丁を振り回し踊り塩を振りまいていた」と表現している。一時は呪術的な迷信に見え、過去の遺物に過ぎないと思っていたのに、歳をとると、その祈りの姿が恋しく親近感を覚えるようになり、理性的に考え合理的な言語を使いながら忘れていたのは、まさにこの祈りの世界であることに気づき、これが本著を書いた理由だったということである。

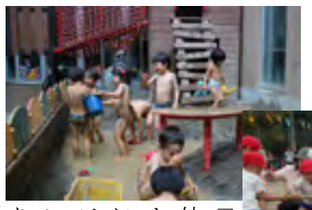
大震災の前で無力だった科学と技術、知識で武装している今の時代が忘れているのは何なのかを改めて考えさせられる。また、オモニの言う通り「これからはチョーセンもニッポンもない世界がくる」ようにと祈る。

さまざまな働き［2］

ようこそキッズスクールへ

子どもが子ども時代に子どもらしく過ごす。この当たり前の事が出来ない時代だと感じています。「嫌な事はいや！」「良い事はよい！」とはっきり表現できる子ども時代にしっかりその気持ちを出させる。それを受け止める。そのシンプルな事が本当に難しいのですね。「受け止める」とは？その通りにさせるとは限らず、その気持ちを理解することです。イエスさまのなさった行いがまさに私たち子どもと関わる大人の指針なのです。教会が子どもの育つ場を持つことは大きな意味があります。子どもの中に神様と出会う機会が沢山あるからです。発達のケアーが必要な子も健常な子も共に育つ、大人も子どもの発達（自らが育つ）を知り、良い援助者になる事が目標です。子どもを持ち育て、大人も育っていくのです。子ども時代に泣いて笑って怒って、また笑ってと生き生き過ごしてほしいものです。与え過ぎ、準備し過ぎることで子どもの育つ場を奪い取ってしまいます。人間は自分で自分を創る力を生まれた時にちゃんと神様から頂いてくるのです。キリスト教保育の原点です。9月に入り、10月5日の運動会に向け準備が始まりました。「まこと大運動会」は、0歳からお年寄りまで一緒に楽しめる会です。卒園児は勿論、地域の子ども、御父母の参加競技も沢山あり、見る会より参加する会です。

1978年深川勤労青少年センター（深川の地で材木屋さんで働く地方出身の若者の集う場所）の10年目にセンター内のまこと学園（茶道・洋裁・書道・絵画・ピアノ・英語教室）の幼児部門としてキッズスクールは発足しました。従来の幼稚園、保育園の枠を超えた理想の教育を目指して誕生したのです。発足当時8名の園児は現在38名。小学校就学前の3年間、各年齢12名～13名の縦割りの1クラスのみです。聖公会保育連盟に所属していますが、115園ある中で唯一の無認可幼児施設です。公的補助金を受けることで縛られることを避け、自由な教育を行ってきました。聖救主教会の地域に奉仕する働き、地域と共に活動する宣教方針の中、働く女性の為にと保育園が出来、学童クラブが、そして20年前特別養護老人ホームが合築され、「まこと地域総合センター」という複合の施設が時代先取りで開始されました。幼児施設は保育園一本でと、キッドスクールは閉園という決断が下りました。しかし、在園父母・卒園父母と教会信徒が初めて話し合いの時を持ち、複合施設の中にスペースが出来、牧師館を外に作ることで決着しました。教会立の幼児施設として、園児は勿論、御父母も教会の様々な行事に参加され、教会信徒の支えにより、この20年間歩んできました。



ここでまた新しい課題が持ち上がりました。10月から施行される「幼児教育無償化」の対象外とされたキッドスクール。問題が起きた時がまさに考える時です。モンテッソーリ教育という素晴らしい教育方法を土台に、縦割りの子ども同士で育ち合うキッドスクールの良さが継続できる良い方法があるはずです。

この複合施設「まこと地域総合センター」の種をまいて下さった初代園長「鈴木勉司祭」が亡くなり24年。過去を知り、これからの30年を見据えた計画を考える時がやってきました。どうぞ皆さまお祈りのうちにお覚え下さり、お支え下さいますことを切にお願いします。

聖救主教会キッドスクール
園長　宮本　恭子

《信徒リレーエッセイ》

教会の松の木

聖愛教会　増岡　眞紀子

現在の聖愛教会の聖堂は、およそ60年前に立教小学校の古い校長室と事務室を移築したものです。聖堂の横には、それよりも前（多分戦前）から松の木が生えています。小田急線の電車の中から松の木が見えると我が家に帰ったようで、ホッとします。

たくさん、松ぼっくりを落としてくれるので、クリスマスリースやバザー用品の制作にも一役買ってくれます。時々、近所の小学生が工作に使いたいと拾いにも来ます。

ところが、10年ぐらい前からカラスが巣を作るようになり、通る人に食べ滓を落とすので、おちおち下を歩けません。特に5・6月頃は子育ての時季なので黒い服を着た人は敵だと思うのか、襲ってきます。

この時代に聖愛の牧師だった先生方は、皆さん被害者でした。

障がい者関連活動連絡会
第29回「お話を聴く会」

同連絡会実務委員
海宝 晋一

7月6日（土）聖マーガレット教会で標記の会が開催され、東北教区大館聖パウロ教会信徒の田畑瑠美子さんが、「託された命 ～娘と歩んだ44年～」と題してお話しされました。

田畑さん一家は、44年前、次女の名奈衣さんを授かりました。しかしその子は、生後7か月で脳腫瘍の手術を受け、術後も度々発作と痙攣に見舞われました。田畑さんは各地の専門医を訪ね、幼い子を背に大館と東京を夜行列車で往復する日が毎週1回、1年7か月続きました。30回近く入退院を繰り返し、2度の大きな手術を受けました。田畑さんがいなければ消えてしまいそうな、まさに託された命でした。名奈衣さんが2歳の頃、いっしょに受洗しました。でも、神様には、不平を言い、娘を助けてほしい、病気を良くしてほしいとお願いするばかり、自分のことしか考えられませんでした。

医師に6歳までの命と言われましたが、名奈衣さんは支援学校を卒業しました。しかし、卒業後、することがなくなってしまいました。そんな時、司祭様が、牛乳パックを使った紙漉きを勧めて、道具も作ってくれました。二人で始めると、名奈衣さんのお気に入りになりました。パックの内側のフィルムを上手に剥がすのです。名奈衣工房と名付け、紙を漉き、手紙やカードにして、皆に贈ると喜ばれました。ある方が、市の教育委員会に紹介してくれました。委員会から、身近なリサイクルとして、市内の学校で教えてほしいと依頼され、名奈衣さんも行くことを条件に引き受けました。始めは、名奈衣さんを遠目に見ていた子どもたちも、実習になると心を通わせてきました。名奈衣さんも見本を示しました。

そのころ、担当医師から、院内学級に名奈衣さんを連れて来てほしいと誘われました。入退院を繰り返した名奈衣さん故の依頼でした。心を病んだ子もいました。お引き受けし、月に1～2回二人で訪問し、ケーキや小物作りを楽しみました。

ずいぶん時間はかかりましたが、神様の御心が少し分かった気がしました。自分を用いてくださったのだと。名奈衣さんがいたから、多くの人と出会い、沢山のことを学ぶことができました。困難を抱えている人やご家族のために、背中を押されているような気がしました。友人らと、近隣の支援学校で紙芝居の読み語りを始め、それはポケットの会として、30年経った今も高齢者・障がい者施設を訪問し、楽しい時間を提供しています。

この日、ご長女に付き添われ、名奈衣さんは開会礼拝と昼食を皆と共にしました。歩くことも、話すこともできませんが、仕草や表情で、時には腕を掴んで意志を伝えてくれます。田畑さんのお話で投影されたアルバムの名奈衣さんはいつも皆に笑いかけています。配布された東北教区報「あけぼの」の田畑さんの文章は、こう結ばれています。

「御心のままに、導かれる光のもとへ顔をあげて進んでいきたい。娘とともに。」

◇　◇　◇

次回クリスマス号
12月22日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（四十五）

1．夫婦喧嘩

信徒「先生は夫婦喧嘩をした時、仲直りはどうしますか」

牧師「そんなことは簡単だよ、“とにかく私が悪かった、ごめんなさい”と謝れば大抵の喧嘩はおさまると教わったからね」

信徒「それは誰の教えですか、聖書の教えですか？」

牧師「違うよ、うちの妻の教えだよ」

2．飛行機の中で

ＣＡ「すみません、緊急事態です。具合が悪くなりました。乗客の皆様の中に牧師さんはいらっしゃいませんか」

牧師「私は牧師ですが、普通、具合の悪い人がでた場合、医者を探すんじゃないですか？」

ＣＡ「いえ、いいんです。具合の悪いのはエンジンで、もうすぐ墜落しますから、最後にお祈りをしていただこうと思いまして・・・。」

3．幸せな気持ち

信徒Ａ「昨日、牧師になって働いている夢を見たよ」

信徒Ｂ「それは素敵な夢を見たね、さぞかし幸せな気持ちになったでしょ」

信徒Ａ「うん、目が覚めたときにはね」